

翻刻資料VI

人文学園創立 30 周年の集い

奥村旅人*

【解説】

本資料は、京都人文学園の創立 30 周年を記念して催された集会の録音記録を書き起こしたものである。資料冒頭には、集会から 18 年後の 1994 年に吉田九洲穂によってテープ起こしの作業が行われた旨が記されている（吉田については本小特集の須永論文を参照）。

この集会には 108 名が出席したようで（380 頁目）、その肩書も昼間部・夜間部各期の卒業生から元講師、理事まで多岐にわたっている。なかでも注目したいのは、関西文理学院の代表者が出席していることである。同学院は元々、慢性的な財政難に苦しむ京都人文学園を金銭的に援助するための営利事業として設立された予備校であった。357 頁で同学院の宮地伝三郎が「関西文理学院は人文学園の分身」と表現しているのは、この出自を背景としてのことである。しかし、翻刻資料IVにおける安永武人の発言からは、学院が財政的な援助を打ち切ろうとしたことが窺い知れる。その経緯はそれから 30 年経ったこの集会内でも改めて、怒りを滲ませつつ述べられている（363～364 頁）。そして 366 頁の渡部徹の発言によれば、この「打ち切り」は勤労協との合併の原因の一つになっていたようだ。

本資料には、上記安永発言をはじめ、参加者の様々な感情をみて取ることが出来る。学生の目線から見た人文学園像を知る上でも、講師が人文学園に関わった理由を知る上でも、そして京都人文学園が合併を選択した経緯を知る上でも重要な資料であると言えるだろう。

【凡例】

資料の翻刻に際しては、以下のように行った。

- ・原則として、旧字体は新字体に改めた。
- ・誤記や書き損じが傍線で抹消されている箇所には、傍線「⊖⊖⊖」を付した。
- ・誤記や書き損じが傍線で抹消され、誤記の前後左右に訂正された文字の加筆があり、抹消部分が重要な意味を持つとは考えられない場合には、抹消前の文字は記載せず、訂正後の文字だけを記載した。

* おくむら たかひと 京都大学大学院教育学研究科

人文学園

創立 30 周年の集い

76 年 6 月

京都人文学園創立 30 周年記念の集い

1976 年 6 月 21 日 京都労働会館

この資料は、京都人文学園史の追加資料として、当日の録音を書き起こし、要約するため表現に少々手を加えたものです。人名や事実関係など、今後修正を必要とする箇所があります(調査校閲中)が、このほど、卒業生数十名の方々が集まりを開かれるとき、この機会にお目にかけての方がよいと思い、杉本喜代巳氏その他の方々に助けていただき、とりあえずまとめました。公にする文書ではなく、同人への私信と思っております。重要で微妙な事項も含まれていますので、取扱いにはご留意下さいますようお願いいたします。

1994-9-13 文責吉田九洲穂。

矢本竜之助「ぼちぼち始めたいと思いますので、入り口のあたりにいらっしゃる方は、奥の方に入っていただきたいと思います。今日の形式は、席をきめるということをしておりませんので、テーブルの周りに、それぞれお座りいただきたいと思います。とくにここがどなたの場所だということをございませので、適宜集まっていたきたいと存じます。なお、先生方はできるだけ、まんなかのテーブルにお集まりいただきたいので、よろしく願いいたします」

川野邦造(以下、司会と記す)「それでは、ただいまより、京都人文学園創立 30 周年記念の集いを開催したいと思います。さきほども申し上げましたように、席はすべてご自由ですので、一か所にかたまらないように願います。

本日は、司会を二人で行わせていただきます。私、昼間部 3 回生の川野でございます。同じくこちらは、夜間部の 5 回生の矢本竜之助君でございます。

私どもの京都人文学園は、1946 年 6 月 5 日に、京都御所の近くで開校いたしました。そののち 11 年間、1957 年、京都勤労者学園の発足にいたりますまで、11 年前継続したわけでございます。その間に、入学いたしました生徒は、合わせますと約 1,000 名に達します。で、卒業した者は 344 名。今日は、卒業生の方々、あるいは途中でやめられた方々も、心当たり聞いてご案内をさせていただきました。また、先生方につきましては、その間、直接学園の指導に携わって下さった方が約 100 名に達します。1 回生が卒業して 9 年、入って 11 年たっているわけでございますけれども、創立いたしましてから、すでに 30 年を経過しているわけでございます。

で、本日のこの企てに出席のご返事を下さった方は、136 名でございます。いま、100 名た

らずの方がお集まりになっています。なお、これからお出でくださるかたが多数かと思えます。非常にご多忙中にもかかわらず、ほんとうにありがとうございます。

ではこれから、皆様にお渡ししましたプログラムに従いまして、進行させていただきたいと思えます。では、まずはじめに新村学園長にお言葉をいただきたいと思えます」(拍手)

新村猛(元学園長)「世話人を代表しまして、私から皆さんに、ご挨拶をいたしたいと思えます。

30年前に、京都人文学園の創立に参加して下さった方々、そして1年間ないし3年間、学んで下さった卒業生の方々、また、資金を提供して下さった堀江友広さん、また勝間さんも、この席に出席しておいでになります。さらに、京都勤労者学園・京都労働学校の校長先生、その他のご来賓をくわえて、このように数多くの来会者が集い、30年前に創立された私どもの京都人文学園の存立の意義を、思い返し、そしてこのような教育事業の経験が、今日の日本の学校教育のみならず社会教育のうえに、寄与してくれることをこいねがって、感想を、二つか三つの点について、述べたいと思えます。

今日、皆さんにさしあげました、『青春の記録』と題する、記念冊子の序文にも書いておきましたとおりに、学園は、占領軍の政策の転換と空前のインフレーションとが要因になって、創立の翌年、翌々年ごろから経営難がはじまりまして、今日のような結果に到達しております。

最近この会の準備の過程で、ことに卒業生諸君の原稿を見せてもらったりしているあいだに痛感したことは、最近のロッキード事件をはじめ、いろいろな問題に関心をもって調べたりしているうちに気がついたことですが、1945年から60年安保の60年までの15年間というのは、日本の歴史のうえで、きわめて重要な時期であったんじゃないかと思うわけです。

この15年の間に、不幸にも、また残念にも、私どもの人文学園は、もとのままのかたちでは維持不可能になりました。非常に困難な転換期にあたり、私どもの微力をもってしてはどう支えることができなかつたわけでありまして。しかし、京都労働学校、関西文理学院という、二つの学校のなかに、京都人文学園は現在もなお、生命を保っていることは、いささか、私どものなぐさめとなっているんじゃないかと思えます。

それから、人文学園が終焉をみたのちにも、昼間部の卒業生の諸君の方に、なんといいましても在学期間が長く、私よりも接触する機会も多かっただけに、ご存じの学生主事としての佐々木さんが、非常に親切に生徒の世話されたのですが、市役所に移られてからも、京都に在留されたのですが、ダビデの会というのを作って、長い間、毎年7月14日に懇親会をつづけておられました。

ダビデの会というのは、ミケランジェロのダビデの像にちなんでつけたものです。その佐々木さんがお亡くなりになって、私は佐々木さんに代わって、卒業生諸君と親しくつきあっていたころということ、念願するようになりました。

そのうち、佐々木さんの残された『動物園の歴史』が出版されて、思いのほか、好評を博し

ました。そこで、記念会を催そうおそうではないかというので、この会館の一室を借りて、昨年の 11 月 23 日に行われました。そのときに、人文学園の歴史を残そうということになり、そして昼間部の卒業生諸君の有志が資料を集めはじめました。

また当時は、大学内の紛争がたけなわになって、戦後の日本の学校教育制度に対するアンケートをとるような動きが起こっている時期でもありますので、人文学園があらたに見直されるようになっていました。

歴史をつくろうという動きが起こったときに、佐々木さんが亡くなるという不幸が起こり、他方、人文学園の姉妹校として設立された関西文理学院でも、創立 25 周年の歴史を編纂しようという計画を立てられたことを聞きました。私自身も取材を受けました。

いよいよこれは学園の歴史を残そうではないかと、またそれにさきだちまして、どうせ創立 30 周年なんだから、なにか記念の集会を、催さなければなるまい、とこういう話になってまいりました。20 周年のときには、誰からもお祝いをやろうじゃないかという話は出ませんでした。30 年になって出るようになった経過は、いま皆さんにお話ししたとおりです。

それからもうひとつ、今日の集会を準備する過程で、わかってきて非常に喜ばしかったことは、昼間部の卒業生で、事情でわずか 1 年間しか在学しなかったにもかかわらず、卒業後もあちこちで活躍し、学園で得たものを大切に誇りに思っておられることを知りました。さらに夜間部の諸君が、1 年ないし 2 年間学んだことを、非常によかった、意義があったと、自分の将来にとってほんとに貴重なものを得たということをですね、こもごも話しておられました。

私は人文学園の経営難で、生活ができなくなったので、名古屋大学の教授に迎えられて、そちらへ行きました。名古屋では専門の研究者を何十人か養成いたしました。しかし、これは人間としての知恵というよりも、専門研究者としての知恵でした。人文学園の諸君と接して、この人たちは人間としての知恵を備えていると思い、さらに人文学園に学んでよかったという声を聞いて、私は、名古屋大学の教授としてかつて味わえなかったところの喜びを味わいました。このことを初めてのべ、卒業生の皆さんに対してお礼を申し上げたいと思います。

それから、堀江さん、住谷さんご兄弟をはじめ、多くのご来賓の方々、講師の方々からご感想や思い出や、今後に対するご希望やご注文を承るために時間をさきたいと思いますので、私はご挨拶はこのくらいにいたしまして、最後に、もうひとつ、10 年たって 40 周年を開きたい、50 年となると私自身も生きていくかどうかかわからない、40 周年までは大丈夫だろうと、健康に自信をもっております。そして、さいわい 50 周年をも皆さんとともに祝うことができたという願望を、最後に表明しまして私のご挨拶を結びたいと思います。どうもありがとうございます」(拍手)

司会「ありがとうございました。立食パーティーとなっておりますが、…。乾杯に移りますま

で、いまひとつ、学園にとりまして非常に重要な方、皆さんご存じの市民団体協議会におきまして非常に重要な役割をしておられます、人文学園の産みの親ともいべき堀江友広先生に、ひとことご挨拶をお願いしたいと存じます」

堀江「ご紹介いただきました堀江です。もともと私は、終戦前後私の義弟がこちらにまいりまして、戦時中、私はいろいろと発明研究をしておりましたが、戦争に負けるなどということは考えておりませんでした。それが、私個人の研究所、工場すべて灰に帰して、呆然となって京都に帰ってまいりました。街をほっついていました。陸海軍から帰ってきた人びと、うちひしがれた多くの人々、そういうときには、人間本来、どんな仕事をやっても、このままで日本はいいのか。そのとき私は、昔の「新しい村」のああいうふうなことに刺激されて、なんとか新しい日本の道を発見するために、意義のある仕事をしてみたい。というのでここにいらっしゃいます義弟の、悦ちゃんかと相談して、いろんな計画を立てたのが友山荘でした。すくなくとも、若い人主体に新しい国を作っていきたいと、いまからいうと、ほんとうにいじらしいような考えでした。

工芸部門、あるいは伊谷さんの行動美術、それから診療所、上村けい先生の音楽などを相談いたしました。やはりいちばんだいじなのは教育だということで、義弟に相談しまして、教育についてご相談するには、京都では新村先生しかないと、いうことで、住谷と、亡くなられた須谷君と私とで、新村出先生にご相談に上がりまして、そして人文学園の構想ができたんです。

そのときはっきりおぼえておりますが、新村猛先生がおっしゃったスクール・オブ・ソウル・オブ・ヒューマニズムという言葉でした。今後、学園がどういうふうに進んでいこうとも、私はこの精神だけは絶対に生かしていただきたいと思えます。

その後のことを実際の運営者にお任せしまして、というよりも、私は、新しい村とかそういう資金面で苦労しました。その点は、私はいろいろ研究や発明をしておりましたので、戦前に非常に研究していたある計器があります。この改良を研究し、これが完成すれば、人文学園やその他の方々にも、資金面で応分の寄付ができるだろうと、いうことで私自身、一生懸命研究をやりました。それが完成したのが、昭和20年です。その間、資金面の困難もすくなくありませんでした。しかし、苦労して撒いた種は、必ず生える。そして、昭和27年以降は財団で研究が完成しまして、皆様に対しても相当の援助が出来るようになりましたが、そのときには、完全に独立されておりました。そして私はその研究した作品を製品化し、蛭川さんが望まれ、中小企業の組織化のために、ずうっと現在までやってきております。中小企業の方々が、一生懸命やっておられます。

私自身でいえば、友山荘運動、人文学園に対して、最後まで約束してきたことを果たそうと努力してきましたし、反省してみてもちょっと悔いのない30年だったと、皆様に対して申し

上げることが出来ると思います」 (拍手)

司会「ありがとうございます。人文学園が創立して 1 年後に、最初の校舎の立ち退きを迫られて、皆さんご存じの鴨川の植物園の向かい側の校舎で、その後 10 年間学習生活が続けられるわけですが、この新しい校舎を獲得するために、堀江先生の非常なご努力があったとうかがっています。拍手をもって感謝の意をあらわしたいと思います」 (拍手)

司会「どうもありがとうございました。次に乾杯に移りたいと思います。準備をいたしますので、皆さん、それぞれどうぞ着席願います」

(椅子の移動、着席、話し声で騒然)

司会「それでは、堀江先生とともに創立の構想を話しに新村出先生を訪ねられた、住谷悦治先生に、乾杯の音頭をとっていただきたいと思います」

住谷「京都人文学園の 30 周年を記念し、関係の諸先生、卒業生の皆さんのご健康と健闘をいのり、いっそうのご発展を祝して乾杯しましょう。……乾杯！」

一同「乾杯！！」 (ちょっと間があって、大きな拍手が会場を満たす)

司会「お席の方へ、ご着席願います。____先生にご挨拶をお願いします」

____「今日拝見した、学園史に無い秘話を 2、3 申し上げましてご挨拶にかえささせていただきますと思います。人文学園の古代史ということです。戦争が終りまして、たまたま私の義弟にあたる堀江友広君が、戦争中たくさんお金をもうけたんで、新円切り替えがありまして、そのときに、たくさんのお金のうち、当時のお金で、200 万だか 300 万円、今でしたら莫大なものでありますが、それをなにが有用なことに使いたい。いろいろ相談されて、いくつかの研究所や学校を考えたわけですが、まず教育方面で、だれか校長をしていただく人がいなければこまる、というわけで、能勢さんと、伊谷賢三さんと、堀江君とでいろいろ相談しまして、新村さんが戦争後京都にいらっしゃるから、とにかく新村さんがあるいはやってくれるかもしれないと、いうわけで、新村老先生をお訪ねしました。そして老先生に新しい教育のこういう考えかたをもっているんですが、お金を出す方もあるんですが、校長としての格のある方を探しています。つきましては、猛先生をみんなが推薦しておるんですが、猛先生にさしていただけるでしょうか、ということをお老先生に申しあげました。その席には猛先生はいらっしゃいませんでしたが、相談してお答えしますということでして、そして、まもなく、新村さんとお父様はお話があったんだと思いますが、とにかくお引き受けするというご返事で、そのための資金というのを、まあそればかりではなしにほかにもあるんですが、私は 200 万円、300 万円もの大きなお金を見たことも持ったこともありませんので、1 週間ばかりあずかったときに困って、それを風呂敷に包んで寝台の布団の下にならべて、その上に毎晩寝ておったんです。

そういうようなことで幾日かそれを暖めておって、それからいよいよ、教育部面にといい

とで、たしか私の家の応接室で10万円だったかと思いますが、とにかく一部を新村さんにお渡しした。それが基礎になって人文学園が創立され発展したのです。学園は新村さん以後に、つぎつぎに有能な学園長がありまして、それと労働学校の方も、また、つぎつぎにいい校長先生が出まして、ほんとうに夢のように、現在のように発展したというわけです。

私、申し上げたいことは、堀江友広氏がいかにたくさんのお金をもっていたかのようにみえますが、それは事実なんです、彼はほんとに苦学生なんです。お家はいいんでありますが、ある事情で、自分は仙台の高等工芸を出ていて、数学部面の方なんです。ところがそんなこと嫌だ、自分は文学をやりたいということでおやじさんと衝突して、まったくすっからかんで東京へやってきた。自分は、早稲田を受けるという。受けた足で京都のわたしのところへきた。合格かどうか分からんけれども、通知を私の家に来るようにして、私のところへ来た。無事に入学ということになりましたが、入学料の60円がない。

私も給料すくないんで、助手で月給60円、アルバイトをして120円だった。で、60円を堀江君に用立てて、その他汽車賃を出して、東京まで行って、とにかく早稲田大学に入った。いまでいう、アルバイトとちがい、親戚の家から新聞配達をし、ほんとうの意味の苦学生をして早稲田大学を卒業したんです。新聞を屋敷のなかへ投げこむんですけれども、新聞を四つにたたんだやつをキューツと音を立ててしごくのがうまかった。新聞配達は、これくらいにならなくちゃだめなんだ、などといっていた。

それから神戸の新潮社(?)で、船の雑誌、米窪満良(?)というのちに片山内閣の労働大臣になったという人が主宰していた『海友』(?)という雑誌を編集したり、それから溝口伝(?)という人の新聞を編集したりしております、その後、自分の叔父の経営しておりました尼崎の洋樽工場で働いて、その間に、もともと工学関係のことができるので、専売特許を幾つとったか、六十とったか百とったかわからない。その特許で、戦争中お金をもうけたんです。

だから、そのお金は、自分の血と汗で得たものです。それを寄付してくれんたんでありますが、堀江君は文学ですね、英語が非常によくできたんです。坪内逍遙の早稲田大学の講義を最後まで聞いたのは、堀江君です。彼は私の所へ来たとき、寝るとき、英語で寝言を言ったり、発語でシェークスピアの台詞をいったりするんで、語学っていうものは寝言をいうくらいやんなきゃ駄目なんだと、私はつくづく考えました。

文学だけでは食っていけないんで、昔とった杵塚でいろいろな発明をして、金をもうけた、いうわけですから、ほんとうに自分の労働によって得た金です。人文学園もでき、労働学校もでき、それから上村けいさんの堀川の音楽学校。音楽は幼いときからやらなければだめだというのが、けいさんの主張です。それを援助すると。それで、堀川の学校をつくった。これは音楽大学になったわけです、結局は。それから診療所の方は、堀江君の義弟の千葉という非常に優秀な専門家がいたが、早く亡くなって、いまは個人の病院のようなかたちになっています。

それから伊谷賢三は行動美術をやる。そのために同じように、援助をした。ここに証人がいますので、嘘じゃありません」（拍手）

司会「本当に、ありがとうございます。本日は皆様がたに、人文学園の記録をお渡ししましたが、いまその記録にのらないお話をうかがわせていただき、非常にありがとうございます。おそれいりますが、正面のテーブルに、椅子をお寄せくださいませ。ご遠慮なくどうぞ。

さきほど、乾杯がすみましたとたんに、ザーッとせきとめられた水がほとばしるように、お互いの話し声が溢れました。のちほど懇談の時間も用意してございますので、ご発言のあるときは、できるだけ静粛にお願いをします。

ひきつづきまして、勤労者学園と関西文理から来賓においでいただいております。勤労者学園から、浅井健次郎（？）様がお見えになっていきますので、ご挨拶をいただきまいたいと思ひます」（拍手）

浅井「今期、勤労者学園の園長を引き受けました浅井でございます。さきほどからいろいろと、学園創立当時のお話をうけたまわりまして、感銘の深いものがございます。当時関係されました先生がたの名簿を拝見していると、われわれもよく存じ上げているお歴々のかたがたがいらっしゃいます。そのときの先生方とそれをきく、生徒の方々の意気みなぎる様子がいまだにしのばれる思いでございます。そのあとを受け継ぎまして、勤労者学園、いろいろと苦勞もございまして、いまだに問題を抱えておりますけれども、創立当時の人文学園の精神をひきついで学校でない学校、格式にはまらない学校、学問をしたいものための学校という伝統を受けついで、今後ともやっていきたいと思ひます。今後とも問題もあると思ひますけれども、どうぞ人文学園に寄せられた熱意を、さらに勤労者学園にもご支援をいただきたいと思ひをして、ご挨拶といたします」（拍手）

司会「まことにありがとうございます。ひきつづきまして、長年、財政的援助を下さいました関西文理学院から宮地伝三郎先生お見えになっておりますのでひとつよろしくお願ひしたいと存じます」（拍手）

宮地「新村先生が初代の学院長でございます。新村先生のあとをひきついで、学院長をやっております。関西文理学院は人文学園の分身ということになりますので、堀江先生はじめ、関係されました諸先生に見守っていただいて誤りないようにやっていくつもりでおります。

いつも、会議をしたり、役員会をしますと、人文学園の話が出るのでございます。それで、私はこの人文学園のことを知りませんから、これはどうしても歴史をつくっていただかなければならないということを申しまして、皆さんの賛成を得ていま、新村先生のお話で、歴史をつくっておられるということで、そのときに関西文理学院の 25 周年の歴史を書こうということ

になりました。ところが、いろいろ話しているうちに、これは文理学院は25年ではないんだろうと、これは人文学園と同じ30年の歴史をもっているんだ。30年の歴史を書かなければ、本当の歴史を書いたことにならないということになりました。現在は、鴨川学園の30年の歴史を書いております。こちらと、われわれの方とどちらがさきに行けるか、わかりませんが、お互いにあい補って、人文学園の創立の精神を明らかにして、後に残したいというふうを考えております。われわれが現在あること、これからどうあるべきかということを考えるには、やはり歴史を考えるとということがいちばんでありまして、われわれが現在働いているときは、いつも人文学園の精神というものを忘れないように、これからのちにもそれを生かしていくこと、それが歴史を書く立場でございます。関西文理学院は、もうひとつは京都人文学園が、いろいろ夢をもっていらっしゃった。その夢の一部分でもわれわれがひきついでゆく。予備校としてでなしに、もうすこし広い意味で、発展をさせていくこの意味でもひきついでいくべきではないか、このことも考えております。

今日は人文学園で学ばれた若い人たちがたくさん集まっておられる。こういう懐かしい思い出をもたれる人たちの学ばれた人文学園、その歴史を継承するわれわれ、責任がたいへん重たいということを考えております。

いま関西文理学院は、3,600人ほどの学生をあずかっております。大変大事な時期の生徒をあずかっているわけでございますから、誤りなきを期したいと思っております。どうぞ皆様方にも、関西文理学院のまちがいないような運営、そして将来につきましても助言、ご援助をいただきたいと思っております。今日はどうもありがとうございました。皆さん、おめでとうございます」(拍手)

一昨晩は今年になって三度お会いできて、もし佐々木さんの逝去がなかったら、どんなにうれしかったことかと思います。とにかく佐々木さんの他界が機縁になって人文学園の卒業生の人々とこれまでにまして親しくなれば、佐々木さんも地下でいささか冥して下さるだろうと自ら慰めるわけです。どうか敦子さんにこの旨お伝えください。／今日仲野力永君が訪ねてくれたので一昨夜もらったカラー写真を見せ、いっどこで撮ったかを尋ね、裏に日付と場所を書き込みました。ぼくが、彼と君たちのお子さんたちのなかで、男の児と女の児を一人づつまちがえたので笑われました。男を女と、女を男と、です。もう七人の孫を持つおじいさんだから恕してくれ給え。仲野君に勧められて、今夜、中日劇場へ『リチャード三世』名古屋公演の千秋楽を夫婦で観て来ました。シェイクスピアの偉さに感心したり楽しんだり驚いたりします。／林達夫著作集の第一、第四、第五の三巻をすでに架蔵していることを確かめました。第二、第三、第六の三巻を請求書と共に送らせて下されば、振替貯金でお支払いします。また、伊波普猷全集を聖文堂書店（京都市北区北大路新町西）を通じて送らせて下さい。購入しますから。

新村猛先生の私信 1974年3月4日 吉田九洲穂・敦子宛て

司会「ありがとうございます。なお、ここで、来賓としてご出席下さっております方々をご紹介したいと思います。勤労者学園の専務理事の青柳先生。同じく勤労者学園の青木先生。（拍手）

次に、関西文理学院の事務局長の岸（申？）田さん。いまお話のありました関西文理学院の歴史の編集に携わっておられます黒田さん。それから、勤労者学園と文理学院の両方から、本日の企てに対しまして10万円ずつのご寄付をいただいております。まことにありがとうございます。喜んでお受け取りいたしたいと思います。（拍手）

それでは、司会者の予定によりまして、次々と進めさせていただきます。友達どうし、三々五々、積もる話をおやりいただいて結構ですが、今日は、多数の講師諸先生がお見えになっております。25名、ご出席を承わっていましたが、現在15名お見えになっております。あと、午後もまた、膝をつきあわせるということもございましょうけれども、どうぞ、テーブルの前

で、ひとことずつで結構でございますから、お話しただければ非常にありがたいと思います。おそれいますけども、マイクの方へおいで願いたいのでございます。はじめに岩井忠熊先生にお願いいたします」

岩井「私、さきほどいただいた記録を見て驚いたんですが、たしか1948年に、人文学園にお邪魔したようになっております。ということは、私が大学を出た年に人文学園に教えに行ったわけで、どういう経過でそういうことになったのか、私いま記憶していないんですが、なんと心臓の強い話だと思って、そのころいったいどんな話をしたんだろうかと思うと、冷や汗の出るような気持ちがおはします。しかし、私、ごく若いときに教師をしたということについて、ひとつの誇りをいまもっておるわけです。と申しますのは、大学を出て1年目から立命館大学に勤務して今日にいたるわけですが、私立大学に長年勤めていまして、いわゆる非常勤講師ということで来られる方は、学校で行われる教育というものにそれほど深い責任をもたないという、…自分の授業をするだけで、もうサッと帰ってしまう、という人が非常に多いんです。しかし、私が若いときに人文学園に行って、とにかく、あの熱っぽい空気に触れたということが、その後、私立大学の教師としてやっていくうえで非常に大きな感化を受けたように思います。

“私立大学の教育には、理想が要る”ということを私はあの経験のなかから、身につまされて感じてきております。大学の教師というものが、とかくそこで給料を得て、そして大学の研究施設というものを利用して自分の研究を完成すればそれでいいんだと、あまり授業とか学生との関係に重きをおかないような傾向がなきにしもあらずです。そういう傾向に対するいわば頂門の一針というようなものを人文学園の経験が私に与えてくれた。そのことがやはり、その後の私の教師としての生活の上に大きな意義をもって今日にきています。その点で私は、皆さんにつまらない講義をしてご迷惑をかけたんだろうと思う反省と同時に、その短い、…短くありません、これで見ますとずいぶん長くなるんですが、その経験が私を現在支えてくれているという深い感謝と誇りをもって、今日までやっているということだけを申し上げて、皆さんの今後のご健康と、ご奮闘を祈る次第です」（拍手）

司会「ありがとうございます。岩井先生からも、私どういう経解ないし動機で人文学園に参加したのか、というお話は、ほかのお方からもございます。日本史につきましては、創立の際いちばん最初に、藤谷先生にお願いしておりました。ご存じのことかと思えます。ひきつづきまして、藤谷先生にひとことお願いしたいと思えます。ただ、まことに恐縮ですが、1分程度でお願いしたいと思えます」

藤谷「藤谷でございます。昨年、佐々木さんの出版記念会のときに、私も出席させていただくつもりでしたが、すこし健康を害したためによろしくありませんでして、こういう会には、初めて出

席させていただいたわけで、懐かしい皆さんの顔を見て、うれしく思っています。

私が人文学園に関係をもったのは、新村さんと戦前からのおつきあいで、はじめて新村さんにお会いしたのは 1936 年でした。その後、同じように治安維持法の弾圧 (『世界文化』事件。同氏は同じころ刊行された『学生評論』に参加) を受けまして、そしてそのあと、新村猛園長のお父さんの『辞苑』の改定などの仕事の手伝いをさせてもらいました。

そういうわけで、戦前からのおつきあいがあります。戦後、人文学園を始められるのに際して、日本史の授業をさせてもらったんです。あのころは、ほんとうに日本の歴史のうえでも数すくない狂乱と怒濤の時代と申しますか、そういう時代でしたが、私個人にとっても、その大変革の時代にあって、力の限り、いろんな仕事、…もちろんその目的は、日本の平和と民主主義を守るということであつたと思いますけれども、そういう仕事のひとつとして、人文学園の仕事もやっていたと思っています。

まだ私は若かつたんで、新村さんたちの教育の理想というものを十分に理解していなかったんじゃないかと思うんですけれども、今日あらためて大学教育というものが、いかにあるべきかということが問い直されているときに、人文学園のもった経験というものが、非常に大きなものであつたんじゃないか、いま改めて検討されていいんじゃないかと思っております。

皆様方、それぞれご健在で、とくに卒業生の方はいろんなところへゆき、人文学園の出身といわれることがありまして、そのときにあらためて、人文学園の果たした役割は小さくなつたんだな、と、自分でも認識を新たにしている、そういうことでございます。今後とも、皆様方のご健康とご活躍を願ひまして、ご挨拶といたします。どうもありがとうございました」(拍手)

司会「どうも、ありがとうございます。窓側の先生がた、テーブルの方へお寄りいただきまして、…。次は同じく、日本史をお教えいただきました、上田正昭先生にお願いしたいと思います」

上田「人文学園創立 30 周年を心からお喜び申し上げます。上田正昭でございます。私は京都大学を出まして、4 年目に人文学園で講義を受けもたしていただきました。北山茂夫先生が、おまえが日本史の講義に行つてこい、といわれまして、岩井先生などとともに、第 4 期から担当させていただきました。その当時、野口さんとか、伊藤さんとかいう方がおられまして、…たいへん、働きながら学んでおられる。研究会もエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』の輪読会をやりたいと、というようなことで、しばらくいっしょに勉強をさせていただいたのを覚えております。

その後、人文学園の卒業であるといつて、いろんな会合で名乗られる方がありますが、今日見えておりませんが、日本のなかの朝鮮文化をやっておられる在日朝鮮人の鄭熙文

(?)さんも、人文学園の卒業生であるということを知りまして、因縁浅からぬものを感じた次第です。懐かしい当時の、私のつまらない講義を聞いていただいた多くの皆さんにお目にかかりまして、ここへ寄せていただきまして、これからさらに多方面で活躍されますことを、励まし、かつ、自らも励まされて進んでまいりたいと思います。どうもありがとうございました」(拍手)

司会「ありがとうございます。それではひきつづき、東洋史を教えておられました北村敬直先生にお願いしたいと思います」

北村「北村でございます。私が関係をもちましたのは、たしか第2年目になると思います。今日お見えになっておられませんが、重沢先生からあと引き受けてくれと、話をおききしまして、それから新村先生のお宅にうかがいまして、いろいろお話をお聞きしました。現在でも、これははっきり覚えておるのでございます。

それから、学校の方では佐々木さんに、お会いまして、それからのち佐々木さんともずいぶん付き合いが長く、お亡くなりになるまで続きました。まだこれからというときに、お亡くなりになって残念に思っております。

それから、今日はお見えになっていませんが、北山先生にも親しくしていただきました。それから、最初の学園の在校生の皆さん、非常に熱気溢れる雰囲気でございます。私は中国史を担当しておりましたんですが、大学を出て何年目ぐらいでしょうか。まだ、3年ぐらいにしかなっていませんので、中国史といってもあんまり知らないわけですね。いろんな質問が出来ますもんですから、こっちも必死になって勉強しまして、当時の講義原稿が、2種類、現在でも手もとにもっておりますんですが、これが、いまでも時々引っ張り出して見るくらいになっておるんです。私の講義自体が、当時の皆さんの満足できるものになっていたかどうか、わかりませんが、自分としては非常に印象深いものがある、いうことでございます。

さきほど、新村先生から、40周年、50周年の会をやりたいとおっしゃっておられましたんで、ひとつ私もそれまで長生きしまして、ぜひ出席して当時の在校生の皆さんにもお会いしたいと思っております。失礼いたしました」(拍手)

司会「ひきつづきまして日本文学を教えていただきました南波浩先生にお願いしたいと思います」

南波「今日ご案内をいただきまして、講師のところに名前を書いていたいただいているんですが、じつは講師という名前には値しないような、臨時講師として、短期間お世話になったものです。当時日本では、戦後、伝統と創造ということが喧しくいわれておりました。勤労者の皆さんにぜひ日本文学、とくに古典のおもしろさを知っていただく、あるいは理解していただく、

いうふうなことで、何回かお伺いしたことがございます。京都では、ご承知のように、蜷川さんというどえらい人物が出てまいりまして、20年間革新府政を保持してこられました。その間、日本の革新政治の灯と申しますか、日本の夜明けは京都だと、いう声をしばしば聞きました。ところがよく考えますと、その京都の、教育の夜明けは、じつは人文学園であったのではないかというように感じておるのであります。戦後混迷しておりますなかに、率先して勤労者の教育あるいは将来日本のあるべき姿を考えて、それを背負う若い人の教育を考えて、新村先生あるいは堀江先生、それに志を同じうされました多くの方々が、人文学園をおつくりになったということは、いまさらながら、その先見の明に深く、敬意を表したいと思えます。

そしてここに30年たったわけでございますが、その当時の生徒の方々が、いま各方面においてそれぞれにご活躍なさっておられることは、やがて、その種がいよいよ広まって、日本の教育は人文学園から始まったといわれるようになっていただきたい、と念願しております。人文学園はなくなったようでもありますけれども、勤労者学園あるいは関西文理として分身が残っているわけでございます。どうか、今後いよいよ創立当時の志をついでいただいて、いっそう日本に根を広く張って、日本の教育の源になっていただくことをお願いするとともに、卒業生の皆様が、いっそうお元気でご活躍になりますことを念願いたします」（拍手）

司会「ありがとうございます。夜間部の時代におきまして、文学の講義の傍ら、親しく生徒のいろいろ生活面まで指導していただきました安永先生にお願いいたします」

安永「私、人文学園の思い出といえば、金に困じた思い出が最大のものでありまして、その当時、雲の上人を上にいただき、金のない運営委員が集まって、今日何時までに3万円つくらないと電気が止まると、そういうピンチの状態のときに運営委員をやらされて、ずいぶん、今だったら、すこしぐらい金出してもいいと思うんですけれども、当時その3万円の金が出来なくて、今日お見えになっていませんけれども、田中八重子(?)さんがK大のある教授の秘書をしていて、その研究費をあずかっておられたんです。その先生が外国へ行っておられる留守だったんですが、その研究費を短時間借用させてもらうという離れ業までやった記憶があります。だから、私、人文学園の思い出としては、ずいぶん苦勞したなという記憶しか残っていません。それも金の苦勞で、自分の力の及ばないところの苦勞だったので、いまだに非常に心に残っているわけです。

ただ、夜間部の学生諸君と親しくなって、いまだに年賀状をやりとりしたり、あるいは家に遊びにきてもらったり、電話がかかって呼び出されて、いっしょに一杯飲んだりというような関係がつづいているということは、私にとって、人文の最大の遺産だというふうに感謝しております。あんまり挨拶になりませんけれども。

いまひとつ、「人文学園の記録」の、関西文理について新村さんの書かれたところは事実

反するので、非常に不満です。経営が苦しくなっているとき、学園を財政的に援助する、支えるために設立された関西文理が、月、50万円、これはずっと出るものとばかり思っていたら、あるとき、150万円、つまり3か月分を渡され、これで打ち切りだと一方的に通告されたんです。極道息子が食い潰すので、手切金を渡すというわけでした。これは、あまりにもひどいやりかたではなかったかと思います。

関西文理は、なんのためにつくったのか、金に苦勞しつづけた私は、甚だ遺憾に思う次第です。あまりいい思い出になりませんが…。人文学園には腹立たしい思い出があるということ、ひとこと申し上げておきたいのです」[テープ、切損以下不明] (拍手)

司会「ありがとうございました。のちほど生徒の方からも、いろいろ話があると思いますけれども…。ひきつづきまして、生物の方でお世話になりました、山内先生にお願いしたいと思います」

山内「私は新村さんとは専門が違いますが、戦争前は『世界文化』事件」というのがありまして、そのころから知っています。今日は、富沢益広(?)君が出てこないですが、あの君や田安(?)君らといっしょに、時間がないから簡単に申しますが、私は民主主義科学者協会というのを組織して、おもに学生民主化とか、職員組合の結成その他、蜷川、高山推薦の政治活動などをやりました。

新村君についての思い出は、終戦後、新村君は「いまの日本の帝大その他は、爆破せい」といったんです。崩したらいい、と。なかなか思いきったことをいうなと思ったけれども、いまにしてかえりみれば先見の明があります。あの当時爆破したなら、赤軍とか、中核とか、……とかもありはせん。旧帝大が、(戦争を阻止する)力がなかったことの指摘は正しいですね。この点は非常に感心しました。先見の明があるんです。そしてその力は、人文学園の原動力に化していると思うんです。町歩きますとね、「人文学園の講師やったりしましたが、先生」という挨拶が、たくさんあるんです。小沢さん(?)とかも講義ききました、といわれる。非常にうれしいんです。私も友達を知る先輩も知るんでしょう。しゃべったり演説を聞いたり、教えた人が、挨拶するからこいよという。こういう力を、新村君の子どもたちが、大きくなって遺志を継ぐだろうと思うんです。そういうわけで、新村君が非常に先見の明があったということだけを、お伝えします。非常に勇気のある人です。これが私の挨拶です」(拍手)

司会「ひきつづきまして、日本文学を教えていただきました、和田茂次郎(?)先生にお願いします」

和田「人文30周年おめでとうございます。私、勤労者学園での講義には、こまごまと記憶がございますが、人文学園では、さきほど南波さんも申されましたが、非常勤講師か、あるいは

それに近い臨時的なご依頼で、皆さんに国文学の講義をしました程度かと思います。ちょうど鴨川の堤防と同じくらいの高さのところの教室でしたから、校舎の 2 階だったでしょう。そこで、昼働いてこられた若い人々に、私がどのような意義のある話をすることができましたか、記憶は定かではございません。ご苦勞の絶えなかった他の諸先生にくらべますと、非常に影のうすい存在ではないかと思えますけれども、新村先生の業績や、学園の意義が、今日非常に高く評価されているというような意味あいにおきましても、今日、ひとことお祝いを申し上げようと、参上したわけでございます。今後のいっそうのご発展をお祈りします」 (拍手)

司会「ありがとうございます。では次に、和田洋一先生をお願いします」

和田「学園 30 周年おめでとうございます。私は新村君と戦争中、いっしょに同志社にいました。戦争がすんでから新村君は、人文学園を設立しました。今日、考えなおしますと、これは既成大学に対する挑戦であったと思うんです。この闘いは不幸にして敗れました。相手が強かったわけです。その相手というのは、ひとつは学歴主義、つまり京都帝国、“帝国”は、まあなくなりましたけれども、京都大学出身とか、なんとか大学出身とか、有名大学を出ないものは、非常に冷たい扱いを日本の社会、また京都の社会で受けたということ。このことは、新村君がどこまで予想しておられたかわからんけれども、これは陋固として抜き難い強い力であります。

もうひとつはさきほど安永君がいわれた、お金の問題で、私たちのいた同志社大学は、お寺や神社のいっぱいある京都に、キリスト教の学校を建てたんですけれども、同志社というのは、これはもう新島校長その他宣教師、教師たちの月給は全部、アメリカから出ていました。アメリカで、新島議はたくさん募金をして、日本へ帰ってきて同志社をつくったんです。新村君にはアメリカからの寄付はありませんでした。(笑)堀江さんが頑張っておられたのですが、これは 100 年前のアメリカの大きな援助とはちょっと比較になりませんでした。

悔しいけども、これは仕方がなかったと思うんです。しかし私は、人文学園が 30 年前につくられたあと、これは試行錯誤、トライ・アンド・エラーだったと思うんですけれども、失敗だったと、人文学園は消えてしまったと、そういうふうにするべきではなくて、あのときの精神というのは、何年か何十年かのに、かならず生きるであろうし、生かさねばならない。そのことは今日、ここに 30 年記念ということで、これだけ集まれたということ、これはただごとではないと思うんです。この人文学園という、いい、理想的な学校があって、それがスーッと消えてしまったということではなくて、それはやはり、あの学校は失敗はしたけれども、失敗して消えてしまったものではないということ、今日の集まりが、ものがたっていると思うんです。

私はそのことを思い、そして、新たに人文学園の歴史が書かれるということに大きな意味を感じ、私もできるなら、なんらかの協力をしたいと考えています。以上でございます」 (拍手)

司会「ありがとうございます。人文学園につきましては皆様ご承知のとおり、各種学校という
ことで計画したわけですが、最初の、いうならば代表格である設置者は堀江友広先生
でございました。そののち、いまお話し下さいました和田洋一先生が設置者として最後まで、
その責任をもって下さったわけでございます。

ところで、次に11年目の人文学園を背負って立って下さった、渡部徹先生、労働問題を教
えていただきました。よろしくお願ひしたいと思います」

渡部「渡部でございます。まあ、なんと申しますか、私は京都人文学園という名前をなくした
張本人でございますので、いろいろ思い出というか、申し上げたいこともたくさんあるわけ
です。さっき安永君が話されたように、私は直接学園にタッチしたのは、たぶん昭和26(1951)
年ごろからではなかったかと思うんです。じつは私は最初っから、山口仏教会館の時代、私は
佐々木さんと、姻戚関係になりますので、そのころからお話もうかがい、また、久野収さんか
ら、たえずうかがっております、私、京都へまいりましたのが昭和24年だったのですが、
そのときはまだ遠方におりましたので、昭和26年に上加茂へ引っ越しまして、それ以来いろ
いろタッチをさせていただいたというか、させられたというか、まあ、私の直接タッチした時
期は、細野武男さん、堀江栄一さん、北山茂夫さん、すこしあとで安永さん、前川嘉一さん、
高桑末秀というふうな先生方と、学園の運営をいたしておりました。当時の運営委員会とい
うのはどういう仕組みであったか、もう記憶はないんですけれども、1年か2年任期かなんかで、
半舷上陸みたいなかたちで交替しておったのではないかと思うんです。もうその26年ころか
ら、だんだん財政的に具合がわるくなり、安永さんがおっしゃったとおり、もっぱらそのこ
とばかりが頭にあって、いかに人文学園の^{ともしび}灯を消さないようにするかのというのが、最大の課題
でございました。

さっきも年誌というか歴史を見ておって、ハハアといろいろなことが思い出されるん
ですけども、関西文理学院ができてから、ずっと援助してもらっておったわけですけども、31
年(1956年)だと思うんですけども、その当時だんだん金額もふえて年間50万円の援助で
した。私ははっきりその50万円はいつまでもいただくと、こう考えておったのです。けれ
ども1956年の夏に、和田さんのところへおうかがいしたところ、それはあと3年だと、ま
あいうなら手切金で、あと150万円だけやるけれども、あとは打ち切りだということで、安永君
もたいへん憤慨をされたわけですけども、こうなると、もうこれはその150万で、ぎりぎり
3年までいけば、そこで手立ては全部なくなる。これではせっかくおつくりになった、人文主
義の精神によるわが国に一つしかない独自の学園をおつくりになった初志が、絶えてしまうの
ではないか。なんとかして、完全にいきづまらないうちに、すこしまだ余裕のあるうちに、な
にか方法を考える必要がある。いろんなこまかいことは略しますけれども、なんとか存続の方
法を考えなければならぬと苦慮したわけです。

人文学園も困っていて、たまたまそのときに、^マ“京都の勤労者教育という面でも、この灯は消してはならないという考えをもった人物がいます。京都の市役所に当時^マ中川忠治（？）という主幹がおられて、そういうことなら、君、こういうのも^マひとつの方法ではないかと、いうふうな話がございまして、いまの勤労者学園を京都市が援助するというので、京都市と共催で労働学校を開催するという方法がとられ、これが成功して今日までまいったわけであります。

住谷先生には初代の校長をお願いして、たいへん苦勞をおかけしたわけですがけれども、そのときにも、いろいろ人文学園のなかでは、とくに昼間の古い方だと思うんですがけれども、渡部は人文学園を京都市に身売りをするというふうなことで、たいへん非難を受けました。久野さんまでが京都へ見えて、私をよんで、そういうことは止めたらどうかと、私もなんか考えようではないかというふうなお話をいただきました。けれども、考えようではないかといわれても、ことお金に関することですから、そう簡単に、あ、そうですかということになり兼ねるのです。むしろ、そういうふうな、身売りをするなどという受けとり方をする方がまちがっている、と、決してそうではない。いわば、発展的に解消をするんだということ、まあ、内部でいろいろ議論し、非難も受けましたけれども、当時の先生方のご援助をいただきまして、まあ幸い、今日の勤労者学園ということで、人文学園の灯は消さずに、今日まで私は、ともしつづけてきたと、こういうふうに思っております。

でありますから、こういうところで、こういうことをいうのも、たいへんあれなんですけれども、京都人文学園を受け継いだのは京都勤労者学園であって、けっして、関西文理学院ではないということだけは、いっぺんはっきりしておきたいと。（拍手）設立の本来の目的を放棄して、尽くすべき相手に手切金を出すというような挙に出たようなところは、けっして人文学園を受け継いだのではない。このことだけは、はっきり申し上げておかないと、私どもがたいへんな苦勞をした…まあ私も当時若かったからやれたけれども、あのときの苦勞というもの、それはほかの細野さんも堀江さんも、すべてそうですけれども、たいへんな苦勞をしたということが、やはり今日、報いられないのではないかという感じがいたします。

それから、最後に、そういうことで人文学園 30 年、それから勤労者学園も 20 年が来年でございます。まあ当時いっしょにやっていたいただいた方々が、皆、勤労者学園で続けていただければ、私もなにすることはなかったんですが、次々、先に勤労者学園から退かれましたので、どうしても私、それはあるいは過剰責任みたいなことかもしれませんが、私が引くと、その灯を消した^マいた^マなことになりはしないかということで、じつは勤労者学園も 20 年間、理事としてやってまいりました。幸い今日、人文学園 30 周年ということになりまして、こういう会ももたれ、私もほぼ責任を果たしたのではないかと思います。また、勤労者学園の方も来年 20 周年になりますので、ここで、お役御免をさせていただいても、もう非難を受けることはあるまいというふうに思います。どうか、ひとつよろしくご了承をいただきたいと思いま

す。」（拍手）

安永「ちょっと補足をいたします。新村先生は今日の案内状に関西文理学院との関係をお書きになってますけれども、甚だ不本意な文章であります。（異議なしの声）関西文理学院は人文学園について、……なんの生産性もないんだといういいかたをされた時期があります。これは肝に銘じて忘れられません。このときに浅井清信氏、和田洋一氏、その他岡本清一ら諸氏が、人文学園から関西文理学院に理事として出向しておられたたわけです。よほどの事情があたりになったことと思いますけれども。

しかし人文学園は、私にすべて、悪い思い出を残しているというのではなくて、得難い知遇を得たという点はあるんです。一人は立命館大学の細野さん、これは私に“世の中、なるようにしかならんがな”という哲学を教えてくれた。これはぼくは、じつにその後の人生にとって非常にためになる教訓であった。もう一人はいま話した渡部さんです。私は、勤労者学園の理事を10年で辞めました。だいたい私10年で鞍替えする癖がありますので、10年で退きました。渡部さんが私にいったことのなかで、いまだに忘れないことは、組合の政党支持の自由を20年前に彼はいっていました。これは私、非常に感銘を受け、いまだにこの問題が起こると、渡部徹という赤黒い顔を思い出します。

立ったついでに申し上げますけれども、勤労者学園は、労働者のための大学として設立すべきだと思います。これは1970年に、京都市と府とが主催した住民議会で、私は文化団体連盟（京都文連）の会長として、一日委員をやらされたわけですが、そのときに、京都文盟といっていますけれども、最後の要請がありまして、労働者のための本当の意味の5年制の大学をつくるべきではないかという提案をしたのに対して、皆がその気になってくれたら、受けて立つというのがその当時の蜷川知事と、富井さんが欠席だったので、舟橋助役が出てきて、これは府市協調して、いまなら、京都でできる労働者教育の方法であるから、皆がその気になって、とくに労働組合が提携して要求を出してくれるなら受けて立つという約束を受けていました。いまだに不発になっていますけれども、勤労者学園がいままでの実績をもっているわけですから、勤労者学園を解体するというんじゃなくて、1年制のいまの組織をそのままにしながら、夜は大学の校舎があいているわけですから、なんとしおてでも、私学におんぶしている勤労者の大学を、授業料を安くしてやってほしい。いま私学がやっていこうとすればどうしても、授業料を上げなければなりません。

勤労者が、夜間の2部にきているかということ、これはもう5分の1程度しかいない。ほとんどが、1部は難しいから、あるいは1部に落ちたから2部に来ている。

ほんとうの意味で勤労者学園で勉強し、勉強のおもしろさ、必要のわかった人たちが、さらに本格的に勉強する場所を勤労者学園は堂々と主張して、なんとかして京都でつくってもらいたいと、願っています」（拍手）

司会「いましがたお名前のお出ました久野收先生から、祝電がまいっております。

『ご盛會を祈ります。久野收』創立から新村さんに協力、論理学・哲学などの指導にあたってくださいました。東京で、社会評論などに活躍の方でございます。

次に、先生ではございませんのすけれども、私どもが非常にご厄介になりました学生主事である、佐々木先生の奥さんがお見えになっております。ひとことお願いしたいと思います」（拍手）

佐々木清子「佐々木が、人文学園の設立に専心するために、21年（1946年）の暮れ、私ども家族も大阪を引きあげまして京都にまいりましたので、私も京都在住30周年になるんでございます。その佐々木が、ちょうど今日、もしこの席におりましたなら、何を話したかということが気にかかりますんですけども、一言居士と申しますか、そういう人でございましたので、今日、一席話せないことをどれほどか残念に思っているだろうと存じます。

私は皆様方とちがいがまして、人文学園に直接の関係がございませでしたし、ちょうど京都にまいりましたころは子どもも小さくて、いろんな点で大変な時代でございました。ですけれども、たくさんの昼間部の初期の生徒さんがたが、うちへ訪ねて下さいまして、その方たちをとおして、いつのまにか自分まで人文学園といっしょに過ごしたような錯覚におちいつているものでございます。

そんなことでございますので、人文学園の昼間部が、残念なことに数年で無くなりまして、またそのあと主人が市役所に勤めるようになりましたことなどから、皆様と接する機会がなくなりましたものですから、夜間部の方だとか、勤労者学園の方には大変失礼なようなことを申すようでございますけれども、私自身にとりましては、人文学園はそれからあとは、“まぼろしの人文学園”というふうな感じに、すっかり変わってしまったわけでございます。

まあ、まぼろしの人文学園だったからこそ、なんていいますか、失望もしないで、いまだに人文学園人文学園と慕っているようなことで、まああるときには、声を小さくして人文学園といわないといけないときもありましたけれども、最近はまだ、なにかその価値を見直されて、大きな声で、過去のことを誇らしげに話したりしているんでございます。まあそんなこと考えてみますと、ほんとに短い間、おつきあいの方々が、皆さん、お互いの気持ちと申しますか、ほんとに友情に結ばれて、いまにいたるまで長いあいだ、おつきあいして下さい、私にとりましては、いつもお力になっていただいて、暖かく頼もしく、ほんとうに助けていただいていることを、心から感謝しております。

ですから、さきほど和田先生がおっしゃいましたけれども、私にとりましては、特別な立場でございましたので、いまだに、死ぬまでまぼろしの人文学園ということで、いつも昔のことを思い出して、また、これからさきもおつきあいをお願いしたいと思います。今日は、ほんとうに盛會で、おめでとうございます。ありがとうございました」（拍手）

司会「ありがとうございます。佐々木先生のご自宅は学園からも比較的近く、放課後といわず、休日といわず、いつも生徒がお邪魔しておりました。お宅には、クラシックのレコードがたくさんあり、美術書が棚を埋めていました。社会科学関係の書物も多く、さながら学園の分室の観がありました。先生の奥様には、そういうわけですから、非常に親しくお世話になった生徒が多いわけです。小さい子どもさんも、食事や会話にくわわって仲良しになりました。

さて、さきほど懇談の時間を用意したと申しましたが、非常に時間がつんでおります。そこでわずか10分ぐらいで恐れいりますが、4時10分まで、こもごも9年ぶり、ないし27年ぶりの友情を暖めていただきたいと思います。そういう時間をもちまして、そのあと、生徒の方からひとことずつお祝いのことばを、これは指名でおしつけるということではなく、あらかじめお願いしてありますから、ご心配なく。

なお、受けのときに小さい封筒をお渡ししてあります。これは最後の記念撮影をお送りするための手間を省く意味でございますので、よろしく願いいたします。

なお、卒業生は344名いるわけですが、本日お見えになられた方は100名たらずでございます。せっかくできました冊子を、残りの方にお送りするわけですが送料がかさみます。それをいくらかでも減らすために、できれば皆さん方で近く会うというような方がありましたら、お手渡しをお願いしたいと思います。申し込まれる方は、のちほど、500円を勤労者学園の杉本さんの方へ送っていただきたい。

なおまた、今度の編集にさいしまして、資料をできるだけ集めました。それを展示してございますので、新聞、雑誌、写真ですとか、非常にこむずかしいものもございしますが、ご覧いただければと思います」(懇談。騒然)

司会(矢本氏に交替)「私、夜間の5回の卒業でございます。なかなか優等生というわけにいきませんが、これから司会にあたりますが、どうぞ皆さまご協力のほど、ひとえにお願いする次第でございます。

したがってこれから卒業生の方々に、ひとことずつ挨拶をしていただくわけでございますが、なるべく優等生らしくない方をお願いしております。それからもうひとつお願いしておきたいことは、時間が延々と伸びていまして、懇談の時間は15時10分から16時10分までと予定しておりましたが、残る時間は、16時30分までのわずか30分でございます。その間に10名の方々にやっていただきますから、1人3分ということです。

なお忘れておりましたんですが、第一部の方で、経過報告がとばされておりましたので、それを30分の最後にあてたいので、結局ひとり2分ということでお願いします。では最初は、昼間1回生の巢張登美子さん、ひとつよろしく願いいたします」

巢張「1回生の巢張です。突然あてられましてなにかから話してよいか、私どもがはじめて人文

学園の門を叩いたときは、戦後、ほんとにもう食べるものがなく、とにかく生きていきさえできればいい、というような時代でした。しかし同時に私たちは若かったものですから、生きていくために何を、どのようにして考えていったらいいのかとか、そういった精神的な面でも、非常に飢えていたわけです。それで、それぞれの地方から、京都の人もおりましたけれども、人文学園の新聞の切抜きなどを見て、はじめて集まってきたわけです。

しかし、いまから振り返って考えてみますと、ほんとうに経済的にも食糧事情も非常に困窮した時代でしたけれども、あの暗い状態のなかですが、先生方にすれば、初めてなんの心配もなくしゃべれるというそんな時代でしたから、本当に情熱をもって、全力を尽くして私どもに接しられたと思うのです。ですから、そういう考えに飢えておりました私たちは、その先生方の情熱を浴び、暖かくそして、激しく、真剣に接することができました。

いまから思うと、そういう点ではああいう時代に、かけがえのない贅沢をできたんじゃないか、私たち集まったものは、考え方、生きていく面では、ほんとうに贅沢を味わえたと、大変喜んでおります。その後、人文学園はこういうかたちで、同窓会といっても、いまどこにあるのかと子どもにきかれても、なんとも返事ができないでいますが、そういう伝統も何も無くても、そういういったいちばん大事なものが、ひとりひとりのなかに残って、これからずっと死ぬまでそういう気持ちで生きていくということは、すばらしいことだと思います。もち時間がないんですが、私は人文学園第一号で、学園のなかで友達であった大久保次郎と結婚しましたが、でも忘れられない学園ですし、それから、友人の中原さんとか後藤さん、また、最近ではほんとうに残念で仕方がないのですけれども、いっしょに何から何まで、細かいことまで相談相手になっていただいた佐々木先生に先立たれて、ほんとにショックなんですけれども、しかし長生きをして、これから皆、あのときの思い出で自分たち、ほんとうに一生懸命生きていくということがいえると思うのです。学校の長さは関係ないと思うのです。簡単ですが……」(拍手)

新村猛さんを悼む——弔 辞

久野 収

ぼくたちの心から敬愛し、信頼した先輩
新村猛さんが逝去されました。あの心暖ま
る温顔にふたび接し得ないと思うと、残
念の気持ちをあらかわす言葉もありません。

した。そのため治安維持法違反の言いがか
りによって捕らわれの身となり、約二年を
警察と牢獄に過ごし、釈放後も初志をくず
さず、戦争の中を沈黙で終結されました。

んたちが創設した「鎌倉アカデミア」とと
もに、ほんとうに新しい民間戦後教育の双
璧であったといわれています。新村さんの
この学校への尽力がどれほど深く、大きか

新村さんはその生涯において、実に多く
の仕事を成し遂げられました。後輩の一人
として、ぼくが努力した活動だけでも、十
指を数えるほどであります。

一敗戦直後は、ぼくとともに、同志社大学
時代の教え子、田畑弘、竹村一、朴元俊、
内海庸介の諸君が創立した出版社「三一書
房」に顧問として参加し、現在の同社の基
礎を築くのに助力されました。

ったかは、同校卒業生、杉本喜代巳、芹沢
栄之、吉田九洲穂、敦子夫妻、その他、多
数の諸君がよく語るところであります。清
水幾太郎さんの主宰した「二十世紀研究
所」と人文学園の共催による市民講座も、

ぼくたちを編集同人とした『再刊美批
評』、戦争直前の反ファシズム運動の月刊
誌『世界文化』、週刊誌『土曜日』におい
て、新村さんは中井正一さんらとともに、
その編集の中心を占め、フランス、スペイ
ンの人民戦線運動を、その文化面、政治面
からの報道と評価を通じて明らかにされま

また同じ敗戦直後、青山秀夫君やぼくた
ちを中心として、「市民による市民のため
の市民の学校」「京都人文学園」を創立し、
その園長を進んで引き受けて、学生、教師
と苦楽をとともにされました。この学校は、
同時期に、林達夫、服部之聡、三枝博音さ

湯川秀樹、宮城音弥、大河内一男をはじめ
多くの実力ある学者の積極的な連続講義を
得て、いまでもその印象の新鮮さは語りつが
れているほどであります。羽仁五郎さんも
たびたび講義に訪れて、学生諸君を激励さ
れました。

司会「ありがとうございました。では、昼間部の 2、3 回を兼ねて、2 回生の天野一郎さんをお願いします」

天野「人文学園ではアウトサイダーのような人間なので、皆さんの前に代表として立つのは適当ではないのに、挨拶をといわれいささか忸怩としております。けれども 20 数年前、御所の側の山口仏教会館にあった学園で、案内を一通いただき、それを読んだときの感動は、いまだにはっきりと脳裏によみがえってきます。

それから歳うつり星改まって、私はいま“48 歳の抵抗”を迎えております。新村先生、佐々木先生、それから久野先生、和田先生などに当時教えていただいた、いわゆる一般教養につきましても、まったく忘却の彼方に去りまして、ただおぼえているのは、新村先生が、“剃刀のような人間ではなく、ペーパーナイフのような人間として生活をしていくように”、とおっしゃったことを座右の銘として、肝に銘じて生きている次第です。

人文学園で教えていただいたことが、自分の人生にどういう痕跡を残しているかといわれますと、これは容易に答えられません。とにかく、時代の波に左右されずに人間らしく生きて行こうという、そういう気持ちでおります。皆さん学園に学ばれて、そして、先生方の教えをただ守るとかそういうことじゃなしに、生活のうえに実現されていることに敬意を表します。私自身は、できるかぎり皆さんのあとをついていきたいと思っておりますから、よろしく願いいたします。

人文学園は実際は昼間を 3 回募集されて、私は 2 回生でしたが、その 2 年目に人数が急激に減りまして、結局 2、3 回生が合体し、私は 3 年間学び、3 回生は 2 年間学んで同時に卒業したわけです。2 回生は今日、ほんの数えるほどしか見えておりません。しかし、20 年あまりして何人かにお会いでき、創立記念日というよりは、昔の友達に久し振りでお目にかかって何よりも嬉しく思っています。

また、非常に人柄のご立派な先生方が、いまだにお元気で活躍されておられるのを拝見し、たいへん嬉しく存じます。先生方のご長生を祈り、皆様のご活躍を期待してご挨拶とさせていただきます」（拍手）

司会「ありがとうございました。それでは次に、夜間 1 回生の香月啓輔さんが九州からわざわざお見えになっています。盛大な拍手のなかで、お願いします」（拍手）

香月「私、夜間第一回生の香月かつきでございます。本日はお招きいただきましてありがとうございました。また、お懐かしい先生方、親しい仲間の皆さんにお会いできたこと、ほんとに心から感激いたしております。私、卒業して、28 年に長崎県の佐世保にまいり、その後ずっと佐世保で生活しております。いろんなことがございましたけれども、今日まで私の心を支えてきたものは、やはり人文学園で学んだ 2 年間の…私どもは夜間 1 年を終え、その後研究科をつくっ

て、もう1年居すわらせていただいたんですが、…この2年間に学んだいろいろのこと、これが今日まで私の心を支えてきました。苦しいときのいわば最後の砦として、やってまいりました。私、現在、10人ばかりの自動車の整備工場と、中古車の販売との商売をいたしておりますが、今日、兎玉あるいは小山内流の商法がまかりとおっている時代に、小さな企業を維持していくということは、非常にたいへんなことで、もう波乱万丈であったわけですが、私は、いつの日にかまた、新村先生はじめ多くの先生方、また、懐かしい昔の仲間にお会いできることを夢みて、その時恥ずかしい思いじゃなく、誇らしい気持ちでお会いしたいと念じてきました。人文学園のモットーとして、私が理解しておりました、香り高きヒューマニズムと近代的合理主義、これを私の心の支えにして、周囲に人間関係をすこしでも広げていって、人文学園の卒業生がこうして日本の西の果て、佐世保でもほそほそと生きているということを自分の心に言い聞かせて今日までやってきました。そしてこのことを、皆さんに知っていただきたい、あるいは、もうその機会はないかもしれないが、いつの日かこないともかぎらないと、心に念じて今日まで生きてきました。

今日こうして、皆さんのまえに誇らしい心をもってお会いできたことを、23年間の念願が果たされたことを、そして人文学園の心を私の心として生きてこれたことを、非常にありがたく嬉しく思っております。さきほどから、多くの先生方の、いろいろなお話をありがとうございましたけれども、やはり人文学園で学んだことを生かしてきた、一粒の種が、西の果ての佐世保でも根付き枝葉を茂らせている、誇らしく生きているということを知っていただければ、もうそれだけで今日出席させていただいた甲斐があったという気持ちです。ほんとうにありがたく思っております。」（拍手）

司会「ありがとうございました。まだ、テーブルの上になんか食べ物が残っております。あと1時間もない間に、ここを引き払わなければなりません。飲んでいただくことも結構ですが、テーブルを空にさせていただく方も、どうかよろしくをお願いします。

夜間3回生の^{あたらし}新幹生さんをお願いいたします。新幹線のようなお名前でございますので、できるだけお早くお願いします」

新「新でございます。夜間の3回生は、今日、6人まいっております。江波さん、私たちのクラスでは、京都で民主的な文化活動をやっておられる、奥田雀草(?)さんの奥さんもいらっしゃいます。

ひとことご挨拶いたしたいと思います。私は、その当時もいまま国鉄労働者です。私の学んだころは大変なときでした。レッドパージがあり、つづいて朝鮮戦争が始まり、そして職場から民主的な人たちが次々追放されて、職場そのものが、民主的でなくなってしまう暗黒の時代でありました。そういうなかで私は、ふとしたきっかけで人文学園を知りまして、学びました。

まさしく暗闇のなかで、一筋の光明を見いだした、このような思いの毎日でありました。いまは自動車が非常に多く走っておりますが、当時は鴨川の堤、松林は、車もなく静かでした。授業が終わったあと、みんなで歌を歌いながら青春のひとつとき、あそこを歩いたのを懐かしく思い出します。

それ以来ずっと私は、学園で学んだことを職場で、そして世の中で実践して、ひたすら民主主義のために、現在でも奮闘している。このことを申し上げまして、簡単ですけれどもご挨拶といたします」（拍手）

司会「どうもありがとうございました。司会者あんまり慌ててしまって、1回から3回に飛んでしまって申しわけありません。それでは、夜間2回生の小山忠さんよろしく申し上げます」
小山「夜間の2回生でございます。本日は、向こうの方に13名が出席をいたしております。新村先生をはじめ諸先生方に感謝の意をこめて、今日のお祝いを申し上げたいと思います。私たちが人文学園に学びましたのは1950年、昭和25年であります。この昭和25年というのは、いま新君が申しあげましたように、5月の16日に朝鮮戦争が始まる。つまり、反動の嵐の吹き荒ぶ時代でありました。そういう時代に、私どもが、あの鴨川べりの木造の校舎にせせせと通いまして、日本の将来を、そして日本のいろいろな原理的な問題まで、諸先生から、いろいろ教えていただきました。

これはいままさにいただいた『わが青春』。この、私どもの若い青春時代に、何が真実であり、われわれ青年がどの道を進むかという考え方、一生の考え方をきめたという意味で、人文学園というものは、たんに30年を懐かしむだけじゃなくて、私どもの一生をきめた、そういう意味合いの学園であるというふうに思っております。本日は、こうして諸先生方とお会いし、20年、25年ぶりで先輩、後輩、同級の皆さんとお会いする集いをもったということ、非常に喜ばしく思っております。

今後も、私ども諸先生といっしょに、いろいろご協力をして、人文学園を消さない、私どもが生き残るかぎり消さない、そのために立派な社会人となり、よい社会をつくるために頑張っていきたいと思っております。新村先生をはじめ諸先生にあつくお礼申し上げますと同時に、卒業生の皆様に心からお祝いを申し上げます。本日は、本当におめでとうでございます」（拍手）

司会「司会者としてはできるだけ劣等生の方にといいつもりでございましたけれども、いままでのところ優等生ばかりで、まことにどうも感激のいたりでございます。それでは夜間の4回生の南野昭雄さん、ひとつよろしく願いいたします」

南野「南野でございます。夜間の4回生の方、ご起立願いたいと思います。今日はちょっと数

は少ないけども、まあこういうことで、私が代表するという立場ではありませんけれども、個々の紹介は省略しまして、私たちは昭和27年の4月に入りまして1年間、夜間の方でお世話になりました。新村先生はじめ皆様に大変お世話になりまして、本当にありがとうございます。改めてお礼申し上げます。

働きながら学ぶということは、なみ大抵ではありません。思い出すことは、3分の1は寝とったということです。はっきり申し上げます。しかしあとの3分の2のなかで、いろいろと先生方の講義を聞いて、それなりに人生観や社会観を育てて今日にいたっております。皆、人文学園に学んでよかったという共通の誇りをもっています。この気持ちをたやみせずに頑張っていきたいと思います。今後ともひとつよろしくお願いたします」(拍手)

司会「どうもありがとうございました。次は夜間の5回生ですが、昼間の1回生とあい拮抗するぐらい今日の出席がよろしゅうございます。谷伝治さんよろしくお願いたします」

谷「夜間の5回生です。新村先生のお顔をうかがっておりますと、卒業式のとくに、先生の話が気に入らないいうて文句いうたのはほくだけだろうと、いうふうなことで劣等生に目されているわけですが、卒業証書は立派にいただいて保存いたしております。

それ以後も5回生は、6回生の人たちといっしょに、何回か集まりをもっていて、ずっと付き合いをさしていただいています。さきほど、新さんがお話しになりましたけれども、新さんは国鉄でも前の方に乗っておられたわけですが、私は車掌で、後ろに乗っています。何事も後ろの方からという格好で、いまま裏方で、労働運動をやっておりますけれども、私自身感想を申し上げますと、職場が大阪で、夜働いたり、朝働いたりという仕事でして、いっぽう住まいが滋賀県で、1時間半ぐらい汽車に乗って通っております。

人文学園へ行きまして、たとえば宮内さんの法律などというのは、職場で、朝鮮戦争のあとですから、暗い職場ですので、非常に、すぐに役に立つような気がして一生懸命通ったんですが、ほかのたとえば英語は、ほくは苦手ですし、こんな科目なんで人文学園でやるんかいな、必要ない、と、よく文句いうたんですけど、しかし、そうはいいいながらも、1時間半かかるところをずっとやっぱり1年間通いつめまして、後半に3分の2の出席率がたりなくて、年休をとってようやく卒業証書をもらえるという頑張りをしたことが、ひとつ懐かしく思い出されるわけです。

何が、そういうふうにして人文学園に夜遅くまでひきつけたのかということ、ずっと考えているんですが、いままってよく分からないわけです。しかし、なんかひかれることがあるんだ、いうふうなところですね。このよいところをこれからも一生懸命学んで、見付け出していきたいと思います。とくに国鉄の労働者は、手足を動かすことが上手ですけども、ストライキの場合なんかでも、頭を使うことは非常に苦手であったという状況ですね。人文で学んで、ひかれるところというのは、やっぱり頭の使い方というんですか、日本の現状のなかでそうい

うふうに勉強もし学習もして、手足を動かすと同時に頭を使うという方法について、その後非常に役に立っているんじゃないかと、ここがやっぱりひかれる要因じゃないだろうかというふうに思っているわけです。

それともうひとつ私どもは世間が狭うございますので、卒業生が年に1回なり2年に1回なり集まって、いろいろ話をするということで、世間を広げていくということですね。非常に役に立つのではないかと考えているわけです。そういう意味で、こういう学園が、もう一度新しい形で、さらに発展するというふうなことを、私たち希望しておりますし、これが京都だけやなしに、大阪やそのほかにも広がるように思っております。自分の感想ばかりのべて申しわけないんですが、これで5回生の代表ということでご挨拶にかえさせていただきます」（拍手）

司会「どうもご苦労さんでした。それでは、ひきつづきまして夜の6回生、女性の方ですが、後藤和子さんです。よろしくお祈いします」

後藤「6回生の後藤です。人文に学びましたお陰で、友人がふえまして、いまだに男性の友達が多いので、いつまでたっても、あんまりいい奥さんになれないでいます。（笑い）矢本君とか禅野君とか中川君とか上野君とか、みんな名前をいわないとおこられるんです。（笑い）そういうよい友人がおりまして、本音のつきあいをいたしております。いまの世の中、男の人は建て前でしか、つきあわないようですけども、私どもは本音でもってつきあっていますが、これも人文のお陰だと思っています」（笑いと拍手）

司会「ありがとうございます。それでは引きつづきまして、7回生の藤田和良さん、ひとつよろしくお祈いします」

藤田「今日、7回生の出席が非常にわるいわけですが、ここに渡辺さんと堀内さんがきております。卒業生のなかでもずっとしんがりの方で、しかも末席の方をけがさせていただいておるわけですが、今日受付けのところでもいただきました記録、あの表題に『わが青春』とありましたが、たしかに私たちの青春は人文学園なしには語られないわけですね。思い出しますとちょうど終戦のときは、私はハルビンにおりまして、関東軍情報部の指令部の将校をしており、秘密戦とかそういう関係で、すぐソ連へ連れていかれて、向こうで25年の刑を受けました。その後、ソルジェニチンが書いている、『イワン・デニソビッチの一日』にあるような生活…監獄と強制労働、重労働の連続でございました。ちょうどスターリンが28年に死にままして、その恩赦ということで10年ほどの重労働で帰ってきたわけですね。

帰って直ぐ、この10年間のブランク、日本と隔絶された私、果たして何をしたらいいんだろう、と、考えたわけですね。自分はいかにいへべきか。日本は将来いかにあるべきなんだろう。

そういうようなことで、私は人文学園の門を叩いたわけです。そのとき私は、あの懐かしい人文学園へ行きました。お化け屋敷のようなところで、びっくりしたわけですが、そこに末永さん、いまの北川さんでございまして、きれいなお嬢さんが座っているのでびっくりしました。それから、毎日々々一生懸命に通いました。その夜間1年と、補修科1年と合わせて2年、新村先生はじめ皆様のお世話になったわけでございます。

先生方は、非常に情熱を傾けて教えて下さいました。その後、よく私たちは聞きましたが、報酬なんかでも、本当に車代にもならないようなことであつたときいておりました。私たち本当に諸先生方の情熱、ご教育に対しまして心からお礼を申し上げたいと思います。それから、もう20年になるわけですが、今度のこの集まりについてもお手伝いをしなければならないのですが、何もできなくて申し訳なく思っております。この20年を振り返るだけでなく、これを原点として、初心にたち帰って、これからも一生懸命、頑張っていきたいと思しますので、どうかご指導のほど、よろしく願いいたします」(拍手)

司会「どうもありがとうございました。さていちばんおしまい、人文学園最後の夜8回生の方から、人文学園最後のところを、挨拶していただきたいと思ひます。では、織原さんひとつよろしく願いいたします」

織原「最後の8回の卒業生でございます。名簿を見ますと、半分以上女の方ですけども、今日出席しているのは約3名です。しかしさきほど来、最後の卒業生ではありますけれども、創立の過程であるとか、その間の人文学園の教育につきまして、はじめてうかがう点もたくさんありましたし、得るところも多くありました。思ひますのに、この人文学園が経済的な問題でいきづまって、10年ぐらいで終わったということでしたが、さきほど、講師の先生もいわれましたが、世の中、なるようにしかならない。これも考えてみますと、ほんとに学園が真剣な自由という問題と、信じるという教育をされて、私ら最後の卒業生でも、みんな社会的な地位だとか経済的な能力はさほどございませぬけれども、やはり、胸を張り、誇りをもって社会生活をしているというのは、受けた教育のお陰だと思ひます。その点につきまして、私は新村先生はじめ講師の先生方にありがとうございますと、心からお礼を申し上げます。

さきほど佐々木先生の奥さんから、人文学園というのは、まぼろしの学園になったというふうに、いわれましたけれども、私はこの学園が、経済的な面でいきづまって10年そこそこでなくなったということは、一面ラッキーマナなことではないかと、思ひます。(以下テープ切れ、録音なし)

杉本「私は、昼間部第1回生の杉本でございます。49年に卒業後、学園の事務局で働いてきて、その後、夜間部の儀我正三郎氏のあとをうけて、51年から6年間、夜間部主事をお

おせつかって、そのあとは、勤労者学園へ移り、現在まで事務長をやっております。

今日の集まりの世話人の事務局長として、経過報告をと思いますが、時間もありませんので、委細は省かせていただきたいと思います。記録の冊子の編集後記に書きましたように、具体的にこの会をもとうということになりましたのは、今年に入って2月のことでございます。それから4か月の間に、この準備が進みまして、ま、私は事務局長ということでもございましたけれども、大半は、あとで話します吉田九洲穂さん、および準備人、名前があがっておりませんが、昼間夜間をふくめ、10数名の方が、献身的にやっただきまして、まとまったわけでございます。あと編集の経過は吉田さんにゆずります。

今日は、こんなにとくさんの方々にお集まりいただきまして、ほんとうにありがとうございます」(拍手)

司会「ありがとうございました。では、…」

吉田「吉田でございます。コマーシャルのスポットふうには1分くらいで報告をさせていただきます。今日ここで後半に話をされた、1949年以降の夜間部の人たちの爆発的な、潜在的なエネルギー、これがお手元にあります『わが青春』をつくった基本エネルギーだと私は感じました。それから、この機会をとらえて、なんとかして、捨て石と申しますか、これから学園史をつくっていくうえに、スタートを切るために捨て石を置こうじゃないか、こういう機会をつかまえてものにしたい、という昼夜間生の意欲が、とにもかくにもまとめあげたということかと思えます。

第2の点は、いろんな意見が非常に多くございまして、昼間部の場合、内部葛藤がいい意味でありました。今後つくられるだろう本格的な学園史のなかでは、そういった方々の意見も、なるべく反映していくことができればいいなというふうに思います。

第3は、お見苦しい点をご覧になりますと出てきますが、これは楽屋ばなしを申しあげる筋のものではなくて、あくまでも出来たものがすべてをものがたるということでもございます。ただ、誤植とかアンバランスなレイアウトとかは見過ごしていただきまして、そのなかの、事実関係のデータから、なにごとかをおくみとりいただければと思います。

最後に、資料が、今回いろんな方から夥しく出てきたこと、一段と資料収集は進んだわけでもございます。これを機会に、杉本さんその他に、こんな資料があるという方は、お寄せいただきたいと思います。この形にまとまりますまでに、夜間部の諸氏、昼では杉本、川野、寺谷の諸氏らの払った努力というものは格段のものがあったと思います。

今後とも、ご批評なりご助言なりをいただければありがたいと思います。どうもありがとうございました」(拍手)

司会「先輩後輩諸兄のご挨拶， どうもありがとうございます。これで1回から8回までの挨拶を終わらせていただきます。それでは閉会の言葉を、『わが青春』第2部第2章「静かなる京都」を書いた禅野修一君にお願いしたいと思います」

禅野「閉会の言葉ということでございますが， 私は学生の立場から， 本日の30周年記念の集いを新村先生から呼びかけをされまして動いてまいりました。その生徒会の世話役を代表しまして， ひとことご挨拶と， 感謝の意をのべたいと思うのです。

本日は， お忙しいなかを， 西は九州， 東は東京から， 非常に遠路を多数の方が， 参加していただきましたことを， あつくお礼申し上げます。なお本日の出席者は， 諸先生方をはじめ全員で108名ということでございます。これもひとえにさきほどから， 先輩ならびに先生方のお話にありましたように， 人文学園の心を示したものと思っております。

なお私ども， 準備にあたりまして， 『青春の記録』とあわせて， この集会を準備しております。なにかと， 時間的な制約がありました。準備の不行き届きのありましたことを， 世話人に免じましてひとつお許しねがいたいと思います。なお， 私どもの学園そのものはもう消えてありませんが， これからもますます人文学園がいろいろな意味で， 蘇ってまいりますように， できることならさきほど織原氏が申しましたように， 50年でなしに， 40周年をこれ以上盛大にひらかれますことを心から願ひまして， 今後のご発展をお祈りいたします。簡単でございますが， 終りの言葉にかえさせていただきます。どうもありがとうございました」（拍手）

司会「閉会の言葉がございましたので， これで終りでございますが， 学園というところはなかなかそうはいきませんで， 最後にもう一度， 新村学園長がひとことということです」

新村「今日108名の卒業生， 講師また来賓の方々の来会に接しまして， たいへん盛大にそしてこのように明るい記念祝祭が行われたことを， 私ども， 世話人を代表しましてあつくお礼申し上げます。さきほどご披露しましたように， 勤労者学園と関西文理学院とから， それぞれ10万円ずつご寄付をいただきました。これは卒業生の昼間部と夜間部の卒業生の， それぞれもっと正確で詳細な歴史を書いてくれるならば， その刊行費にあてたらどうかと思っております。私がきめるんじゃなしに， あくまでも， 昼夜の卒業生諸君のきめることで， 私は前から， その活力， というものは信じておりました。

今年2月の初めに平凡社で吉田君とあったときに， 林達夫さんが， 鎌倉アカデミーの創立当時， それから経営に苦勞した話をなさいました。出版物としては， 鎌倉アカデミーの歴史は遠からず出るんじゃないかときいております。しかし， 鎌倉アカデミーのもとの講師， 学習した人たちが， このような盛大な集会を催すだけの活力， 意義があったという， そういう意識もちつづけてきたかどうかは疑わしいと思うんです。これは， 私はひとつ， 誇っていいんじゃないかと思うんです。

50周年といいますがとすこし遠すぎますから， ぜひ40周年または35周年を開く企画を， も

人文学園創立30周年の集い（奥村）

との講師を代表して、卒業生の諸君にお願いをしたいと思います。これをもって、私の皆さんに対するお礼の言葉にしたいと思います。どうもありがとうございました」（拍手）

司会「それでは、予定どおりの時間にうまくいきましたので、これから記念撮影に移りたいと思います。カメラ担当の横井さん、よろしくをお願いします」（拍手）

横井「おそれいますが、写真は4列でとります。黒板に書いてありますが、いちばん後ろは椅子の上に立っていただく、と。後ろから2列目は立っていただくだけと。その次は椅子に腰かけていただく。その次は座っていただくという格好になりまして、いちばん前列の方は、ここに貼ってあった紙（「30周年記念の集い」の貼紙）をもつていただくことになります。こんなだけたくさんでございますので、できるだけ要領よくしたいものですから、恐縮ですが、椅子を50個向こうへ要ります。東の方にお座りの方、全員椅子を持ってずっと行っていただきたいんです。おそれいます。お願いします」（騒然と、準備がおこなわれる。以下略）（了）

京都にはじめて成立した「民主戦線統一協議会」による高山市長、蜷川知事出現の基礎がおかれた運動にも、京都市役所の石田義三郎氏らとともに、新村さんやぼくたちはその中心として積極的役割を果たしました。

学者たちの独自の運動として大きな意味をもった、われわれの「平和問題談話会」「憲法問題研究会」にも新村さんは、恒藤恭、末川博、桑原武夫、その他の諸先輩とともに、その京都部会のアクティープの役割をつとめました。

名古屋大学新設仏文学科での研究活動については、お弟子の皆さんが詳しく語られるであります。

愛知県知事選挙における革新系統一候補としての新村さんについても、他に語る人がおられると思います。ひどい風邪で応援に行けなかったぼくは、六選をめざす桑原候補に決して勝てないとの評判に対し、接戦、あるいは勝利を信じていました。新村さんの祖父は静岡県の初代知事で、最初三河地方の一部は静岡県に属していたよう

で、同地方の老人たちには、鉄道敷設をはじめ同知事の数々の業績の記憶が伝えられていたからです。新村さんはいかにも新村さんらしく、革新票と保守票の一部を合わせる広さを持ち、もう一步というところで肉薄しました。

国際平和大会についても、新村さんはヘルシンキ大会をはじめ、いろいろの大集会に日本代表の一人として出席し、ソ連や中国の大国主義やさままの政党エゴイズムに、おだやかであっても、粘り強い抵抗をつづけられたようです。

原水爆運動の分裂と抗争も新村さんの頭を悩ませ、「平和事務所」をつくって統一に努力しつづけられた様子です。この問題はたぶん、吉田嘉清さん、川原満雄さんたちの同志が詳しいと思います。

ぼくは、小田実、鶴見俊輔、吉川勇一君たちの組織した「ベ平連」の主権するベトナム反戦運動の国際市民集会で新村さんと顔を合わせるのを、ひそかに楽しみの一つにしていたものです。

『広辞苑』編集の苦勞については、他に

くわしく語る人々がいられるでしょう。ただ一つ隠れている事実をいえば、『辞苑』が岩波書店に移されて『広辞苑』になるとき、岩波書店の布川角左衛門氏にとりつき岩波茂雄さんの快諾をとりつけられるきっかけを作ったのは、ぼくでありました。その後、『広辞苑』とのつながりが薄くなってしまったのは、初版のときに執筆を頼まれ、多忙のためにぼくが辞退して、新村さんをいたく落胆させたからでありました。

数々の活動と業績をかえりみると、新村さんは、日本の戦中、戦後の民主主義運動、平和運動の生き証人の重要な一人であったという思いを深くします。現在の諸運動が新村さんの遺志を引きつぎ、新しく生かしてくれることを切望して、この弔文を終わります。

新村さん、もって瞑して下さい。
一九九二年一月七日

(くの おさむ)

本稿は、名古屋市で行われた故新村猛氏の告別式に寄せられた弔辞を、筆者の承諾を得て掲載したものです。

編集部 7